

彼に言っても仕方ないとは解っていたが抗議するような声が出てしまう。

「でなければこの時期にこんなに空いているはずがないだろう。見た目は穏やかな海だが所々急に深くなつて流れも激しくなる。禁止になる前は足を取られて溺れる者も多かったそうだ」

「そうなんだ。水着持ってきたのに残念だな」

「知らずに来たのか？」

「海なら泳ぐの楽しみにするもんだろ。スイカ割りも。それに俺海水浴つて子供の頃以来で凄く楽しみにしてたんだ」

つい唇を尖らせて言ってしまった。あまりに子供っぽかったかと思ひ直して彼を見ると、さっきまで呆れていたふうだった彼は面白そうに笑つて、

「病で静養に来たと聞いていたが、泳げないと拗ねるぐらいなら心配は要らないのかな」

と、俺をからかうように言うのだった。そういう態度だからまあ嫌われないのだろうとほつとした。暫く同じ屋根の下で過ごす相手なのだから食事時ぐらい仲良くするに越した事はない。

「ヤマトは何しに来たの？」

見たところ彼は俺とあまり年齢も変わらないようだった。周りに遊ぶところもない、泳げもしない海に友達と

一緒にもなく一人で来るのはやっぱり俺と同じような理由なんだろうか。

「夏休みだからな」

「夏休み？」

「珍しく長い休みを取つたのだから、知つた顔のいない場所で静かにのんびり過ごそうと思つただけだ」

では俺のように病気というわけではないのだろう。

「休みを取つたつて事は学生じゃないの？」

「ああ。なかなか休めない仕事なのでこういういった機会は珍しい。暇を持てあますという感覚は初めてだ」

「ちよつと解るな、それ。あれもこれもやりたいなど思つてもいざ暇になるとどうしたものかと思つて思つよね」

「そうだな。せつかくの休みだから有意義に過ごしたいものだが」

休むというのはなかなか難しいものだ、とヤマトは苦笑を浮かべた。彼のそんな表情がどこか懐かしいような気がしたが、どうしてそう思うのか理由は解らなかつた。

翌朝、昨日よりは少し早く目が覚めた。窓を開けるとぬるい風が流れこんできたが、閉めたままにしておくのもっと暑い。顔を洗い、部屋の冷蔵庫に入れておいたパンで朝食を済ませて本を手を外へ出ようとしたが、既にかなり陽射しが強くて外出は諦めた。そうかといって自室でエアコンを効かせて読書では自宅にいるのと変わら

地下にあるから当然陽射しは差しこまないけれど、吹き抜けに面して配置されていて擬似的に外光を感じられるようになってる。窓枠の意匠は司令室の大時計を思いださせた。一週間過ごしたジブスのあらゆる設備に俺達はいちいち驚いていたが、それはそのままヤマトの背負っているものなのだ。

今更になって湧いてきた罪悪感にはやり場がない。ごめんなんて言ったところで俺には何も出来ないし、ヤマトだってそんなのは望んでいないはずだ。

「前より優れた世界にしてみせるときみは言った。私はそんなきみを見ていたいと思っただ。だから春海、きみが私の事まで負う必要などない」

そんなふうに言われたら余計に気になる。でもそれをしてはいけないのだろう。

「本当にヤマトは凄いいよね。あーあ、俺とんでもないヤツに好かれちゃったな」

気負うかわりに冗談めかしてそう言ったら、思いがけずきよんとした目にぶつかかった。

「……好き？」

ヤマトは俺を見つめたまま首を傾げている。

「私が、きみを？」

「う、うん……違うの？ え、俺超勘違いしてた？」
てつきり好かれているものだと思っていたけど違うの

だろうか。

勘違いだったとしたらこんな恥ずかしい事はない。取り繕おうと焦る俺を見つめていた彼は不意に笑った。

「ヤマト？」

珍しい穏やかな表情に今度は俺のほうがちびつくりする。

「好き、か。そういうふう考えた事はなかったな」

はつきりと否定されて俺は恥ずかしさに言葉を失った。呆れているのだろうか、こちらを見るヤマトの顔つきに棘はないが、どこか困ったようにも見えた。

「ふむ、私は無意識のうちにきみがそう思うような態度を取っていたのだろうか？」

「も、もういいから……」

何を言われても今は恥ずかしい。

この一週間ヤマトが俺をやたらと買ってくれてるのをずっと不思議に思っていた。戦ううちに悪魔使いとしてはかなり強い方だという自覚は芽生えたけど、単純な魔力なら俺より高い仲間は他にいらし戦闘のセンスだっただ俺一人が飛び抜けているというわけではない。統率力や判断力と言われても、セブテントリオンや悪魔との戦いを皆で生き抜いてこれたのは偶然や仲間の力と言った要素もかなり大きかったとヤマトも知っているはずだ。

昨夜ヒナコ達と話していて、その後ヤマトに会いに行つて、漠然とした好意をはつきりと自分に向けられたもの

として自覚した。でもそれは勘違いだったようで、ヤマトは別に俺を特別に好きだと思っていたわけではないようだ。

「きみが欲しいとは何度となく思ったが、その具体的な意味を考えた事はなかったな」

「いや、えっと、別にそれはもう考えなくていいから……」

何を言っても墓穴を掘る気がして口籠もる俺をヤマトは見てヤマトはまだ笑みを浮かべている。こういう俺だけを特別扱いする態度に疑問を持っているつもりがいつのまにか自惚れてしまっていたみたいだ。てっきり好かれていと思うたのに残念だな。

「……あれ？」

「どうした？」

自分の思考が一瞬理解出来なくて固まった。残念って、残念って何なんだ？

すぐ横でヤマトは怪訝そうに言葉をなくした俺を見ている。ベッドに並んで座って……この一週間でこんなに近くに居る事を許す程に俺達は近づいた。多分ヤマトがこんな距離を許すのは俺だけだ。だからすっかり勘違いして、俺はその事を残念だと今思っている。

残念という事は、という事はだ。俺はヤマトに好かれたいと思っていたのか？

いやいや、だってヤマトはジブスの局長だ。この一週間生き抜く為に寝床と食料は大切で、それを提供してくれたジブスの責任者に好かれようとするのは当然じゃないか。

そんなふうに関心して自分も、現実にはもう違うのだと解っていた。昨日の戦いの後でヤマトはジブスの局長を辞すと言ったのだし、後はポラリスに会うだけというこの状況下でヤマトに好かれて得する事なんてそんなない。他人に好かれたらそれは嬉しいけれど、返せもしない気持ちで勘違いして残念だなんて思いあがった事は普通は考えるはずもなく……だからつまり俺のほうでそういう事なんだ。

「あああああ……俺マジか。マジでヤマトなのか」

「さっきからどうしたのだ？」

困惑したヤマトを見遣ってまた俺は真っ赤になった。今度のは恥ずかしいからではなかった。自信満々ないつものとは違う、そういうらしくない表情は年齢相応でいいな、と思う自分をもう否定する事は出来ない。

俺のほうが好きなのだ、ヤマトを。

だから勘違いを残念だと思おうし、世界の終わりかもしれないこんな間際に話をしたと思ったのだ。

「なんでもないよ。ええっと、ちよっと人生って、かなり不条理だなんて噛みしめてたところ」